

Title	チッテリオ、ダニエル准教授に聞く：日本は研究しやすい環境が整っている
Sub Title	
Author	田井中、麻都佳(Tainaka, Madoka)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2010
Jtitle	新版 翁理図解 No.5 (2010. 10) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000005-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



日本は研究しやすい環境が整っている

専門家でなくても誰もが手軽に扱える、紙のセンサーの開発を手がけるチッテリオさん。スイス・チューリッヒ出身のチッテリオさんが、縁あって日本で研究をするようになってから、今年で通算して8年になる。研究者どうしのつながりが強く、予算的にも設備的にも研究環境に比較的恵まれている日本は、研究者にとってとても魅力的な場所なのだという。

——いつ日本にいらしたのですか？

スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETHZ)のドクターだった1996年に、共同研究プロジェクトに参加するため、東京大学理学系研究科の化学・バイオセンサーの研究室に所属したのが最初です。そのときは3ヵ月間だけの来日でした。

ヨーロッパの大学では、通常、ドクターコースを終えると1年ほど海外に留学してから就職します。たいていの学生はアメリカに行くのですが、私はアメリカには行きたくなかった。研究のためというよりも、自分の人生の幅を広げるために、文化も言葉もまったく違う場所で、新しいことにチャレンジしてみたいと思ったからです。そこで、ドクターのときに訪れた日本で、ポスドクとして研

究をすることにしました。

実は最初の留学のときに、1日だけ慶應義塾大学を訪れる機会があったのです。その折、現在、所属している鈴木孝治先生の研究室を訪ねて、自分の研究に近い分野の研究をしていることを知っただけでなく、慶應の学生はとてもオープンで、話がしやすく、よい印象をもちました。

慶應義塾大学のポスドクとして再来日したのは、1998年3月です。当時は1年間の予定でしたが、ようやく日本での研究生活に慣れたところで帰国するのもったいないし、研究室の雰囲気も居心地よく、先延ばしするうちに4年半ほど滞在することになりました。

——日本語はそのとき習得されたのですか？

ええ。最初はほとんどしゃべれなくて、日常の買い物にも困るほどでしたが、週1回の日本語家庭教師や学生とのコミュニケーションを通じて徐々に上達しました。とくに学生とのやりとりが一番効果的でしたね。

その後、2002年の秋にいったんスイスに戻り、大学で助教授として働き始めました。同時に、慶應の研究室でいくつか特許を出したことがきっかけで特許に興味をもつようになつたので、もう一度大学に入りなおして勉強し、弁理士の資格を取りました。

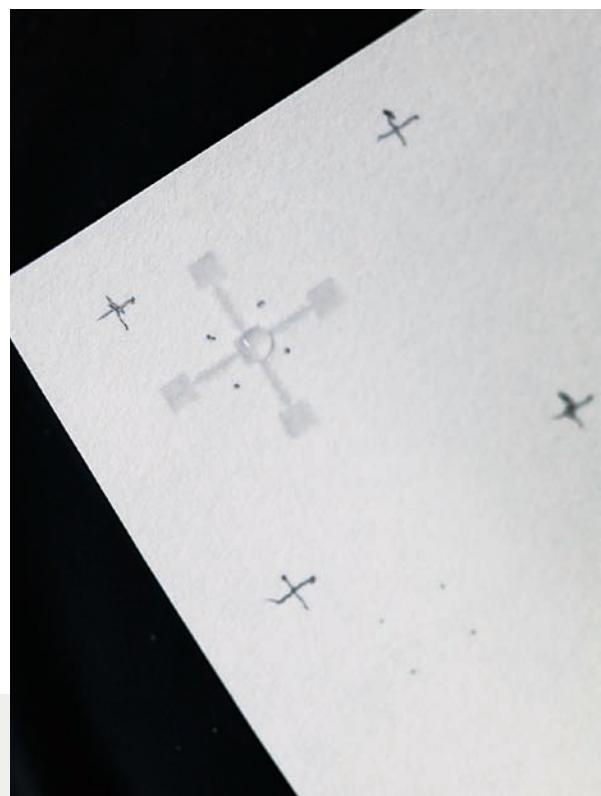
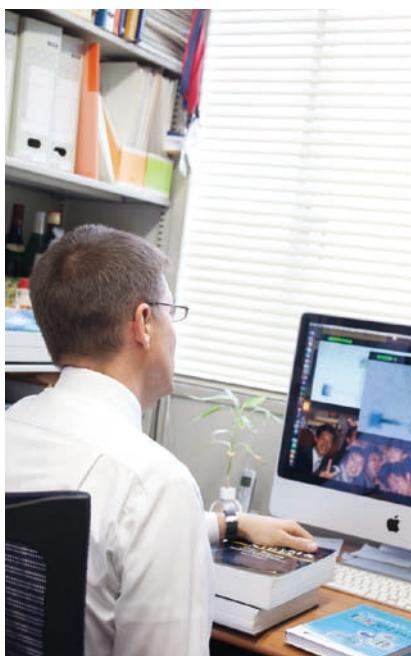
こうしたキャリアも携えて、その後、いったんスイスの化学メーカーに就職しました。でも、結局1年で辞めて、再び日本に戻りました。

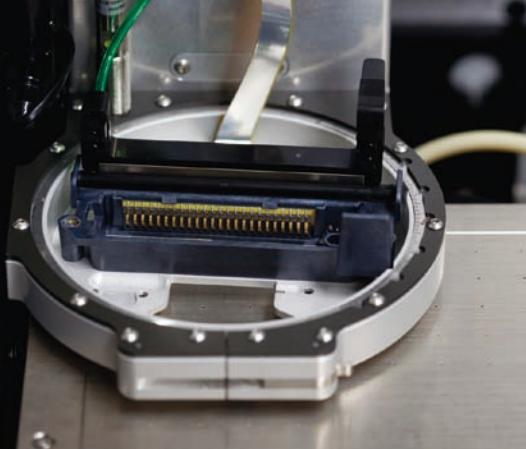
——なぜですか？

大学の研究室で実験したり、論文を書いたり、自由な発想で研究に取り組んでいたのに、会社に就職したとたん、そうした生活がなくなつたら、急に将来に対して不安を抱くようになつたからです。やはり自分は研究者に向いていいると思いました。

そんな折、鈴木先生から新しいプロジェクトのお話をいただいて、2006年に再び、特別研究助教授として慶應義塾大学理工学部に戻ってきました。2009年度からは、専任の教員(准教授)になりました。

インクジェットプリンターによる紙のチップの研究には、2007年から取り組んでいます。慶應義塾大学は研究者に





とって素晴らしい環境が整っている場所だと思います。

——研究しやすい環境にあると？

自分でプロジェクトの提案をし、それが通ったら、大学がサポート環境を整えてくれますし、それでいて自由に研究ができるのがいいところです。

今は状況が変わってきていますが、それでも、日本は比較的、研究予算を取りやすい環境にあると思います。また、鈴木先生をはじめ、日本では研究者どうしの結びつきが強く、コネクションを大事にしているのはいい点ですね。自分の研究分野と離れていることを知りたい場合でも、ネットワークを通じて、誰かに相談できる環境にあります。

——ところで、先生のお名前はイタリア名でしょうか？

先祖が1800年代にイタリア北部から移住してきたためです。父はスイス出身、母はドイツとスイスの国籍をもっています。母国語はドイツ語です。

ちなみに、幼い頃から研究者に憧れていたということではなく、パイロットになりたいと思っていたのですが、目が悪かったので断念しました。学校では外国語（英語、フランス語、イタリア語、ラ

テン語）の成績がよかったです。先生からは語学の勉強をしたらどうかと薦められていました。もちろん外国語の勉強をするのは好きだったのですが、それを仕事につなげたいとは思いませんでした。

研究者になったのには、隣のマンションに高校の化学の先生が住んでいたことが影響しているのかもしれませんね。よく学校まで車に乗せてもらって、化学の話を聞いたことを覚えています。それから、中学生用の化学の実験セットに夢中になったこともあります。実験に失敗して、部屋の壁紙が茶色に変色してしまったこともありますね（笑）。

——ご自身で手を動かすことがお好きなんですね。

ええ。実は料理も得意なんですよ。料

理って、化学の実験に似ているところがありますからね。日本ではずっと日吉周辺に住んでいて、1人暮らしということもあります。時間があれば、友達や学生たちを呼んで手料理を振る舞うこともあります。

手だけでなく、体を動かすことも好きなので、休日に時間があればアウトドアを楽しめます。サイクリング、スキーやハイキングなどですね。日本の若者があまりハイキングをしないのには驚きました。いい自然風景がたくさんあるのだから、もっと自然を楽しんでほしい。私はそういった気分転換で、研究への活力を取り戻しています。

◎ちょっと一言◎

● 学生さんから：ダニエルさんは、とても気さくで話しやすく、皆、先輩のように慕っています。やりたいことをやらせてくれるだけでなく、親身になって相談にも乗ってくれる、とても頼れる先生です。

（取材・構成 田井中麻都佳）

さらに詳しい内容は
<http://www.st.keio.ac.jp/kyurizukai>

研究室で実験したり、
論文を書いたり、
やはり自分は研究者に
向いていると思いました。

チッテリオ、ダニエル

Daniel Citterio

既存の物質を組み合わせたり、全く新しい材料（色素、高分子など）を開発することにより、産業・医療・環境分析への応用を目指した化学センサーおよびバイオセンサーの開発に取り組んでいます。スイス、チューリッヒ生まれ。1992年スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETHZ) 化学科卒業、1998年同大学大学院博士課程修了。慶應義塾大学ボスドク研究員を経て、ETHZ 助手に就任。その後、スイスの化学メーカーにて弁理士。2006年慶應義塾大学に戻り、2009年より慶應義塾大学理工学部応用化学科准教授、現在に至る。

